平成２９年９月１５日

能美市議会
　議長　倉元　正順　様

広報特別委員会
副委員長　田中　大佐久

能美市議会広報特別委員会行政視察報告書

平成 29 年７月３日から４日にわたり、静岡県菊川市議会、愛知県北名古屋市議会へ行政視察研修のため出張したので、その概要を報告します。

１　視察日　　平成 29 年７月３日（月）～４日（火）

２　視察先　　静岡県　菊川市　　（３日）
　　愛知県　北名古屋市　（４日）

３　内容　　議会広報誌のリニューアルについて

４　参加者　　副委員長：田中　大佐久
　　委　　員：開道　昌信、近藤　　博、
　　山本　悟、仙台　謙三、北村　周士
　　随　　行：議事調査課　長村　学

５　今回の視察のねらい

能美市議会では平成 26 年３月に議会基本条例を制定し、「開かれた議会」「信頼される議会」を目指し、議会改革に取り組んでいる。議会活動の透明性を図るとともに、議会への関心度を高めるためには、議会に関する情報を公開する手段や内容を今まで以上に充実させる必要がある。

その手段のひとつとして議会広報誌の刷新に取り組んでいる議会も少なくない。代表的なものは、あきる野市の「ギカイの時間」が良く知られており、今回視察対象に選んだ 2 議会のいずれもがそれを参照している。市民アンケートや独自の取り組みが行われた先行 2 議会の例に学ぶことによって、能美市議会においても、より市民のニーズにこたえられるような広報誌へ発展させることをねらいとする。

☆静岡県菊川市議会

議会広報が市民に広く読まれていないのではないかということから、そのリニューアルを企画、アンケートを実施し、他の自治体の広報誌との比較検討を行った。その結果、あきる野市が取り組んでいる広報の支持が高く、若い世代にも手に取ってもらえるように「フリーペーパー」のような体裁にすることを方針とした。

表紙デザインは、市で行われている写真コンクールの入賞作を用い、隠れた観光名所を紹介している。また、最終頁には小学校６年生の紹介ページなどを設け、その親世代にも手に取ってもらえるような工夫をしている。

毎号、巻頭において特集を組み、市内の諸団体への取材を行っている。これも、広報に知っている人が掲載されていると手に取ってもらいやすい、といった面を持ち合わせているとともに、堅苦しい議会広報誌を少しでも読みやすいものにしようという工夫である。

編集は議員広報委員が行い、特集の取材や写真なども特定の議員が担っている。これは一面ではその積極性を評価できるが、今後の課題として、議員が何らかの理由でその委員を離れた場合に後任がうまく引き継げるのかといった問題を同時にはらんでいる。

「議会のひろば」というタイトルも、できるだけ議会のイメージを柔らかくしようとしたもので、市民からの反応は概ねよく、広報誌に親しみが持てたなどの意見が寄せられている。また、全面カラー印刷を施し、ページ数も増やしたものの、予算は十数万円の上昇に抑えられており、その取り組みが評価できる。

☆愛知県北名古屋市議会

北名古屋市の議会広報誌は、①タイトルの公募、②表紙デザインの大学生への委託、③横書きの広報紙という点に大きく集約できる。

まず①については、「きたしる」という広報誌名を一般に公募し、議員で審査し決定した経緯がある。同時にデザインも委託し、16,200 円の委託料で完成させている。

表紙デザインの委託（②）は、市と市内にある芸術系大学が協定を締結し、1 回あたり 16,200 円で委託するものである。その委託料は、大学を通じてそのままデザインした学生に振り込まれる仕組みとなっている。写真等を用いない斬新なデザインで、親しみやすくなったという声がある一方で、マンガみたいだ、軽すぎる、といった声が聞かれるのも事実だという。

広報誌を横組みにするという３点目の工夫は、全国でも何例か見られるとのことであるが、従来の縦組みとは違い、やわらかな印象を与える。一方で、毎号ファイリングしている利用者からは、突然横組みになったことで、ファイリングの方向が逆になってしまった、などの問題点を指摘されているという。

議会モニター制度の導入をするなど、市議会活性化の取り組みにも余念がない。タブレット端末の導入により、ペーパーレスを目指したいとするなど、改革案をまとめており、今後も学ぶべき点は多いと考えられる。

●所感

議会広報の刷新、リニューアルと一口で言っても、その手法は多々あるのが実際である。市民にクローズアップした あきる野市の「ギカイの時間」、特集記事に毎号取り組み市民が手に取りやすい雰囲気づくりに努めている菊川市、横組みにして近年の横文字文化に対応し、平易な言葉遣いを重視している北名古屋市など、それぞれに試行錯誤している状況を伺うことができ、早速、能美市の広報においてもこれらの内容を検討していけるのではないかと感じている。

一方で、市民アンケートの結果「安っぽくなった」、「軽すぎるのではないか」といった意見が寄せられているという実情も、今後の参考になるもので、検討していくにあたっての注意事項として留意していきたい。

いずれの広報においても共通している点は、特集記事や表紙デザインなど、市民参画型の広報誌が作成されていることである。いかに市民に関心を持ってもらうかというところで、議員よりも「市民が主役」という目的を持っているような風潮がうかがえる。そこに力点を置きつつ、観光資源＝風景写真や地域資源＝大学生といったつながりを生かしているのである。

広報誌の横組みに関しては、数字の説明や質問・答弁における英単語の使用などが増えてきた背景から、特に今後検討が必要になってくると思われる。事実、現行の能美市議会広報でも予算の説明などは横組みで作られている部分があり、すでに混在しているのが実際である。バインダーにつづった際に、開き方がこれまでとは逆になってしまう、などの意見も参考にしつつ、検討していく必要がある。

全面カラー化についても、低予算での実現が可能となっていた菊川市の事例も参考にしつつ、今後能美市でもより読みやすい、親しみやすい議会広報誌の作成を検討していきたいと考える。

以上、視察を通じて感ずるところをまとめ、ご報告いたします。